

佳作

世界一優しい嘘

静岡県 静岡市立清水第四中学校二年 岩崎 健太

「この席、どうぞ。私はすぐ降りるので。」

混雑した列車の中で、途中から乗ってきたお年寄りの方に、一人の男性が言いました。季節は真夏、車内はまさにすし詰めといった様子で、大変蒸し暑くなっています。冷房の風も、あまり届きません。途中駅から乗ると、立って乗るしかありません。お年寄りの方もとても暑そうに、満員の車内で立っていました。そんなとき、一人の男性が、お年寄りの方に席を譲ったのです。男性も、やっこのことで空席にありついたのでした。最初は、お年寄りの方は、少し遠慮した様子でした。しかし、男性が「自分はすぐ降りるので、大丈夫です。」

と言うと、お年寄りの方は、男性の座っていた席に座りました。

この様子を見て、私は、この男性はあと一駅か二

駅で降りるのだろうと思っていました。列車は次の駅に到着。しかし、男性は降りません。すぐとはいっても、さすがに一駅では降りないのかと思い、この時はまだ不思議に思いませんでした。列車はその次の駅に到着しました。しかし、まだ男性は降りません。この辺りから、男性はいつになったら降りるのだろうかと思い始めました。いくつも駅を過ぎ、ついに、お年寄りの方は列車を降りました。しかし、男性はまだ列車に乗っています。男性は、「すぐ降りる」はずです。

結局、男性は終点までこの列車に乗り続けました。お年寄りの方に席を譲ってから、一時間以上もの間、男性はこの列車に乗り続けました。つまり、男性は、お年寄りの方を遠慮させないために、自分はすぐ降りると言っていたのです。相手のためには、多少は実際と違うことも言うこともできる、そんな優しさが、男性にはあったのです。

私は、とても幸せな気分になりました。自分が人のために何かをしたわけではないのですが、素晴らしい場面に出会うことができ、嬉しい気持ちになりました。そして、このできごとを誰かに伝えたいと思いました。あのお年寄りの方も、このことを誰か

に伝えたいと思います。全く違う場所から来て、違う場所へと向かう、見ず知らずの男性とお年寄り。偶然列車に乗り合わせた人の間で起きたこの出来事に、奇跡のようなものを感じました。そして、自分も、あの男性のような優しさをもった人になりたいと思いました。今、自分があの様な場面に出会っても、あの男性のようにできるかはわかりません。しかし、いつかは、あの男性のようになりたいと思っています。そのため、この経験をいつまでも覚えておくと思います。男性がお年寄りに言ったことは、本当か嘘かという嘘になりますが、それは『世界一優しい嘘』だと思います。私も、またいつか、どこかで、そんな優しい行動ができるようになりたいと思います。